

鎌倉出土の馬具

菊川 泉（文化財課 埋蔵文化財調査員）

1 はじめに

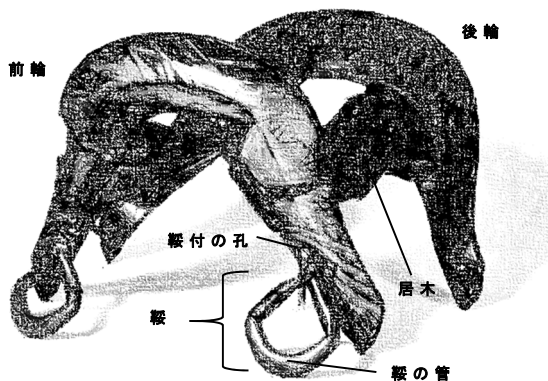
鎌倉は中世の遺構が良好に残り、遺物も多様かつ多量な地域であることは周知のとおりである。しかし「武士の都」と言われながら、多く使用されていたはずの武具や馬具など、武士のイメージと直結する遺物は実に出土例が少ない。これらは貴重品であり、壊れたからといって捨てられる性格のものではない。部品の再利用なども行われていたと考えられ、出土点数が少ないことは「当時の武士たちが武具を大切に扱っていたことを示す」[河野 1988]と理解したい。

筆者はかつて「鎌倉出土の武具・馬具」[菊川 1991]において、これらの集成を行ったが、それからすでに歳月が過ぎている。馬具に関しては、その間、この集成を大きく見直すべき出土事例は無く、若干点数が増えたにとどまっていた。それほど「めったに出土しないもの」であるのが実情、そしてそれが鎌倉の出土傾向ともいえる。しかし近年、新たに良好な資料も加わった。ここでは新資料を挙げつつ、あらためて鎌倉の中世遺跡から出土する馬具を整理してみたい。

なお、「馬具」とは、広義では騎乗具・調教具・飼育具など、馬を飼うために用いる全ての道具を言うが、ここでは狭義の「馬具」（騎乗具。馬を使役〔制御〕するために使用され、馬に装着する道具）とする。

2 中世の馬具と出土例

鞍橋 各部の名称



くらぼね
【鞍橋】（P18 図1）

「鞍橋」は一般的に「鞍」とも呼ばれ、私たちが「鞍」といってイメージするのはこの「鞍橋」であることが多い。「鞍」は馬に乗るために装着する皆具を指す言葉でもあるので、ここでは「鞍橋」という語を使う。

「鞍橋」は馬の背に身体を固定させる装置。前輪・後輪・居木からなる。左の図は部位の名称を示したものである。

鎌倉の出土例は、これまで後輪や居木の破片が数点であった。他に図1-5は鞆付の孔の座金と考えられる銅製品である。

1は螺鈿鞍（後輪）の破片。炭化している部分が多く、火災に遭ったものか、不要になって燃されたものかと想像する。焦げてはいるが、漆地螺鈿である。「漆地螺鈿」とは木地の表面に粘土や砥粉を漆で練ったものを付け、貝片を貼り付け、漆で塗りこめ、それを研ぎ出して文様をあらわす技法で、平安時代以降盛んに行われるようになったとされる。鎌倉でも多く用いられていたはずだが、出土例はこの1点にとどまる。

図1-2～4は黒漆居木の破片である。漆器と言えは碗、皿、膳、盆などの什器がほとんどを占める中であって、特異な形状から、調査当時、居木の一部であるとの認識がなされなかったものもある。佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）の報告書においては、4の部位をわかりやすくするために模式図を用いた。しかし鎌倉では、出土点数の少なさゆえに統一的な図化が行われていない。したがって、図からは部位を読み取りにくく、比較しづらい状況にあると言えるだろう。全国的には古墳時代の馬具の出土例は多く、これに従って図化するのが望ましいが、中世のものは形状にも差異があり、細片ならば一層図化が難しいのが現場の現状ではないだろうか。

近年、中世の鞍橋の出土で注目すべき事例があった。静岡県浜松市の中屋遺跡で出土した瓜文螺鈿鞍で、前輪・後輪・左右の居木がほぼ完全に組み合った状態で出土している。出土した遺構は「13世紀中頃」とされる〔及川・武田他 2010〕。中世の鞍橋については、小松大秋氏の分類に当てはめ、中期から後期にかけての特徴を併せ持つものであるとされた〔小松 1990・2010〕。ここでは組み合った状態の鞍橋と、鞍橋を構成する各部品各々が図化されており、参考としたい資料である。

鎌倉では、2021年、若宮大路周辺遺跡群（雪ノ下一丁目 161番 36地点）で居木がほぼ完全な形で出土している（左写真）。漆は塗られておらず、表面に摩耗が認められる。出

居木 出土状況



土層位の年代は13世紀末から14世紀初頭である。〔滝澤 2022〕

漆の塗られていない鞍は、「木地鞍」「素木鞍」「白骨鞍」^{しらほねくら}等の名称があり、その存在が知られている。現存する鞍橋で最古様を示す正倉院宝物中の10背は全て木地鞍である。古代から中世の遺例としては他に手向山神社（奈

良県) 蔵の素木鞍が知られている。また『兵範記』には「沈地螺鈿御鞍」(永久三年(1158)九月廿一日条)、「木地螺鈿花橋鞍」(保元四年(1169)正月十日条)などの記載があり、漆を塗らない木地に螺鈿を施したものも存在していたようである。[鈴木 1990]

中世は、前輪・後輪の周縁や・居木の枚数・幅など、鞍橋の形状が大きく変化した時代と言われている。しかし出土例は述べたように非常に少なく、これらのみで変化を追うことはできない。小松氏の分類は伝世品を漆工技術など工芸的観点から導き出したもので、中屋遺跡の場合もこれに当てはめて考察されている。将来的に、考古学的成果がこの分類に新たな情報を加え、裏付けていくことができるか、鎌倉を含めた中世の遺跡の調査に期待がかかるものと思われる。

【^{しおで}鞍の^{くだ}管】 (P19 図2)

「鞍(四緒手)」は鞍橋の前輪と後輪の左右にそれぞれ付けた紐・装置。^{むながい}鞅(胸繫)・^{しりがい}鞅(尻繫)に繋ぐためのもので、^{くだ}管を紐に通して用いられる(前項鞍橋の図参照)。鎌倉では骨や角製の管が複数出土しているが、これらが鞍の管として用いられるものの可能性があると考えられる。

管というものの自体には様々な用途があるだろうが、鎌倉で出土するこれら骨(角)製の管は「刷毛の柄」ではないかとされることが多かった。この場合の「刷毛」とは、化粧刷毛、眉作刷毛、櫛搔などの化粧道具のことであり、管の両端に毛を植えたり針金を束ねて通したりしたものを想定しているのであろう。

しかし、鞍にも近似した形状の管を用いる場合があることを指摘しておきたい。図2に挙げた出土品の特徴として、整った円筒ではなく、やや弓なりに反りをもつものがある。多くが文様を刻んでおり、その上から漆を塗ったものも含まれる。側面一箇所に平な面が設けられているものが多く、この平らな面には文様帯が無い。「化粧刷毛が転がらないように」という工夫だと解釈される場合もあったが、疑問が残る。

形状のよく似た鞍の管の例として、出土品では法住寺殿跡の金銅製の管が挙げられる[寺島他 1984]。現存するものでは、手向山神社蔵の黒漆四枚居木鞍(重文 11世紀)、黒漆移鞍(13世紀)などが挙げられる。いずれも管は金属製で、黒漆四枚居木鞍のものは一部が後補である。京都博物館蔵波船蒔絵螺鈿鞍(17世紀)は管が弓なり(三日月状)を呈する(前項鞍橋の図はこの形状を参考にしたものである)。

13は無文で明瞭な弓なりを呈し、これに似た形状である。同じ遺構から9型式(15世紀前半)の常滑片が出土している。

13世紀から14世紀の絵画資料では、円盤状の「鏡鞍」が多くみられる。伝足利尊氏像(京都国立博物館蔵 重文「騎馬武者像」)に描かれているのもこれである。この形が中世の一般的なものと思われる現状もあるのではないだろうか。

しかし同時期に管状のものも使われていたのではないか。鎌倉で多く出土するこれらの管は、それをうかがわせる。

日本古来の鞍が実用品だった時代が終わり、後世、鞍橋が美術工芸品として鑑賞の対象となり、付属する装置を取り外されるようになったという歴史がある。そのため今日我々が「鞍」として見られるものの多くは、付属品を外された「鞍橋」であろう。そうした流れの中で、鞍橋から鞍が取り外され、現存するものからは鞍橋と鞍のセット関係を知ることが難しいのが現状である。鎌倉で出土する骨(角)製の管については、鞍に用いられるものと断言はできないものの、今後も検討する必要があると思われる。

【野沓】(P20 図3)

「野沓」は、^{あぶみ} 鐙との摩擦を緩和するために下鞍に装着するもの。伝足利尊氏像は、これを明瞭に描いている点で、出土品説明のためにしばしば用いられてきた。他にも騎馬を描いた絵巻等では、出土品と全く同じ形状のものが多く描かれている。

基本の形は中央が幅広の左右対称、端部にそれぞれ1箇所の穿孔があり、これを鋌で固定したものと考えられる。中央に小さな穿孔があるものもある。

図3-2は錆が進んだ鋌が残っている。また8は端部の穿孔は2箇所の小さい穿孔で、ボタン状。14は端部の穿孔が壊されており、使用された後に別の用途のために再加工されたものと思われる。中央部の文様が磨滅している点は、他の遺物と共通する。報告書は写真のみの掲載で、法量の記載がないが、野沓と推察する。

1は鉄製で、周縁に細い溝を刻んで装飾としている。2は鉄製のものの表側を薄い銅板で覆っているもの、3はその銅板のみが残ったものである。

出土したものは、形状はほぼ同じだか、材質・構造によって ①鉄製のもの ②鉄製で表側を銅板で覆うもの ③骨(角)製 という3種に分けることができそうである。

野沓は金属製であるとされてきたようだが、鎌倉では金属製のものだけでなく骨(角)製のものが複数出土している(5~14)。絵画資料ではわからないが、文様が刻まれているものがあつたこともわかる。また文様を刻んだ上から黒漆を塗っているものもある。6~8のように中央部が磨滅しているものがあることから、鐙との摩擦を強く受ける部品であつたことがうかがえる。

その点では、4は木製で疑問の残る製品である。「野沓？」として報告されており、調査当初より野沓と考えることに疑問が持たれていたようである。確かに、摩擦に耐える素材ではなく、両端に穿孔が無いという点で、野沓としての役割は果たせまい。しかし大きさや形状が極めて近い。筆者はこの製品は野沓そのものではなく、製作時の原型(モデル・見本)のようなものではないかと推察する。

骨(角)製のものには菊花や格子などの文様が細密に刻まれ、装飾性に富むものが複数見られる。野杳はこのように、使う者の好みやセンスが反映される部品のひとつであったのかもしれない。

その意味で注目したいのは、5・10のように鹿角の表面の凹凸を残したものである。菊花や波などの文様を配しながら、凹凸を削り落とさずに残している。また、この特徴は先に挙げた「管」など、野杳以外の鹿角製品にもしばしば見られるものである。こうした遺物は、これまで製作途中の未完成品であると理解されたり、技術的に劣る、細工の粗いものであると評価される場合もあった。しかし、鹿角の表面特有の波模様のような凹凸は「舂目」と呼ばれている。

「舂目」という語は、中世の文学作品、特に軍紀物では、「舂目の鑓」として常套句のように登場する。たとえば、

「褐に赤地の錦を以て 壬 衽色えたる直垂に、萌黄威の鎧着て、足白の太刀を帯き、二十四指いたる 截生の矢負ひ、薄切斑に鷹の羽わりあはせて作いだりける、舂目の鑓をぞ指添へたる。」（『平家門語』卷第十一 那須与一）

といったものである。「鑓」以外に「舂目」という言葉が用いられる例を筆者は知らないが、この鹿角の表面の凹凸が他の道具にも好んで用いられている可能性はあるだろう。鎌倉の鹿角製品に見られる特徴は、その傾向を示しているようにも思える。また、舂目と線刻の文様を組み合わせることで全体の図柄を構成していることも、特徴の一つと言えるかもしれない。

我々現代人には「凹凸を削って滑らかに加工した方が美しい」と思え、そのためにこれらが「未完成品である」と解釈され、出土した遺跡が生産・製作の場ではないかとされることもあった。しかし、素材自体の独特な文様や質感を「美」と捉える感性は、時代を超えて人間が持っているものであろう。たとえば皮革、木目や樹皮、さらには打ちっぱなしのコンクリートなどに「美」を感じ、それをデザインとして身近なものに取り入れようとすることは、現代でも行われている。同じように、中世、鎌倉では、鹿角の表面の質感が好まれ、馬具にも取り入れられていたとは考えられまいか。

【^{くつわ}轡】(P21 図4)

「轡」は、馬の歯槽間縁（前歯と奥歯の間の歯のない部分）にはめ、手綱につないで馬を制御する道具。日本では馬の口に入るところを「銜(喰)」、面繫を受ける壺金を「立聞」、手綱をつなぐ部分を「引手」（または「水付」）、銜の両端にある板(環)を「鏡」という。

鎌倉での出土例は鉄製のもの2例にとどまっている。

図4-1・2は、鏡が円環状を呈するもの。発掘調査報告書が未刊行で、出土状況等についての明確な情報が公表されていない。が、概ね13世紀の層位からの出土であったと記憶

している。1・2は重なった状態で出土し、一对をなすものと思われる。図は、調査当時筆者が発掘調査員として実測し、拙稿〔菊川 1991〕に掲載したものである。

3は杏葉型の鏡をもつものである。こちらは報告書刊行後、付着物や錆を落とし、クリーニング後に再実測を行ったものである。断面が四角形の鉄の棒をねじって杏葉形（ハート形）の鏡とし、立聞と一体に作られている。立聞を後から鏡に付けている1・2との違いである。片山寛明氏は鏡轡・杏葉轡を平安時代から中世にかけての代表的轡とし、杏葉轡の形の一つとして3の形状を「逆ハート形」と説明している。そして室町時代後期頃から轡の主流は、十文字轡や文様轡に移行すると捉える。〔片山 1990〕

『後三年合戦絵詞』、『平治物語絵詞』をはじめとした中世の絵画では、出土例と似た鏡を持つ轡が描かれている。鏡轡（伝足利尊氏像に描かれるもの）、杏葉轡、そして円環状の鏡を持つものが同じ絵巻中に登場する場合もある。騎馬するのは武士や公家など。当時の使い分けや、絵師の意図的な描き分けがあるのか否かはわからない。しかしいずれも同時代に用いられていたという可能性は読み取れる。ただ、鎌倉での出土例は2例にとどまり、鎌倉では二つの形状のものが存在していたとしか言えない。

3 おわりに

馬具から少し視点を変え、鎌倉時代の衣服や道具などの装飾に目を向けてみる。

武士の服飾を知る上で、私たちが馴染んできたものの一つが、軍紀物の装束描写であろう。武士の合戦時の服装や持ち物は前述の『平家物語』の引用でも見たように直垂・鎧・太刀・兜・矢・弓・馬・鞍が描写される。また狩装束の場合は小袖・直垂・行膝・竹笠・矢羽・弓・馬・鞍が描かれる。たとえば次のような例である。

「愛敬三郎がその日の装束には、下には師（獅）子に牡丹の織物の小袖に、上には嶋摺の松原に鶴を飛ばせたる直垂に、^{おおまがら}天斑の^{むかばき}行膝に生の絹にて裏打たる竹笠を谷風に一揉揉せて。鶴の本白を以て借染（仮初）に^は作いだりける大の鹿矢に^{はしめうごう}気装籐の弓の真中取て、^{つぎせ}鞆毛なる馬に黒鞍置て乗るままに、左の岳より出で来る。」（『曾我物語』〔真名本〕卷第八）

『曾我物語』（真名本）卷第八では、有名な「富士の巻狩り」のシーンで、この愛敬（愛甲）三郎を含めて40人の御家人たちの^{いでたち}出立が描写される。小袖や直垂の布地の種類、色や文様、また文様の織・染・刺繍の別。行膝の文様や皮の種類。笠の裏打ちの生地の種類や色・文様。矢羽の（鳥の）種類と文様。弓の籐の巻き方。馬の色、鞍。そしてそれらのコーディネート。その描写が具体的に列挙されるのである。

「物語」と言っても当時は読まれるものではなく「語り物」。芸能者によって語られる一種のエンターテインメントであったことが知られている。聴衆はそこで列挙される描写を耳で聞き、想像する、という社会だった。語られる出立のバリエーションは、聴衆が見つめている武士たちのいわば「お洒落ポイント」であったろう。

その描写が事実かどうかではなく、また、たとえそれが誇張された表現であったとしても、当時どのような色、文様、染織、道具（武具・馬具など）が存在し、好まれ、あるいはもてはやされていたのかを知る上で、注目すべき資料と言える。出土品を検証することと、決して無縁ではない。

弘長の追加法（『関東新制事書』弘長元年（1262）〔鎌倉遺文八六二八〕）では、当時贅沢品として用いられていたものを知ることができる。この法令はいわば贅沢禁止令であるが、馬具では「鞍豹虎皮切付」「銀鍔轡」「黒漆并貝鞍」「總鞆」「蒔鞍」「轡絲鞆」などが条件付きで禁止されている。銀の鍔や轡、螺鈿や蒔絵の鞍が、かなりの贅沢品として実際に存在していたことがわかる。ちなみに『曾我物語』引用部にあらわれる「大斑（鹿の夏毛の大きな斑点のあるもの）の行藤」も禁止の対象である。

鎌倉で多量に出土する漆器は、「中世は蒔絵や螺鈿の時代」「庶民には行き渡らない」といった工芸史の概念を塗りかえ、漆絵の食器が豊かな庶民の間でも使われていたことを証明してきた。黒地に朱漆で文様を描く、あるいはスタンプで連続模様を施した碗・皿は、鎌倉の出土品としてすっかりおなじみになったのではないだろうか。

また、何に押されたのかはいまだ不明だが、滑石製鍋の破片を加工したスタンプも多く出土している。発掘調査からは得られない材質の、文様を施した「何か」が、多く存在していたわけである。

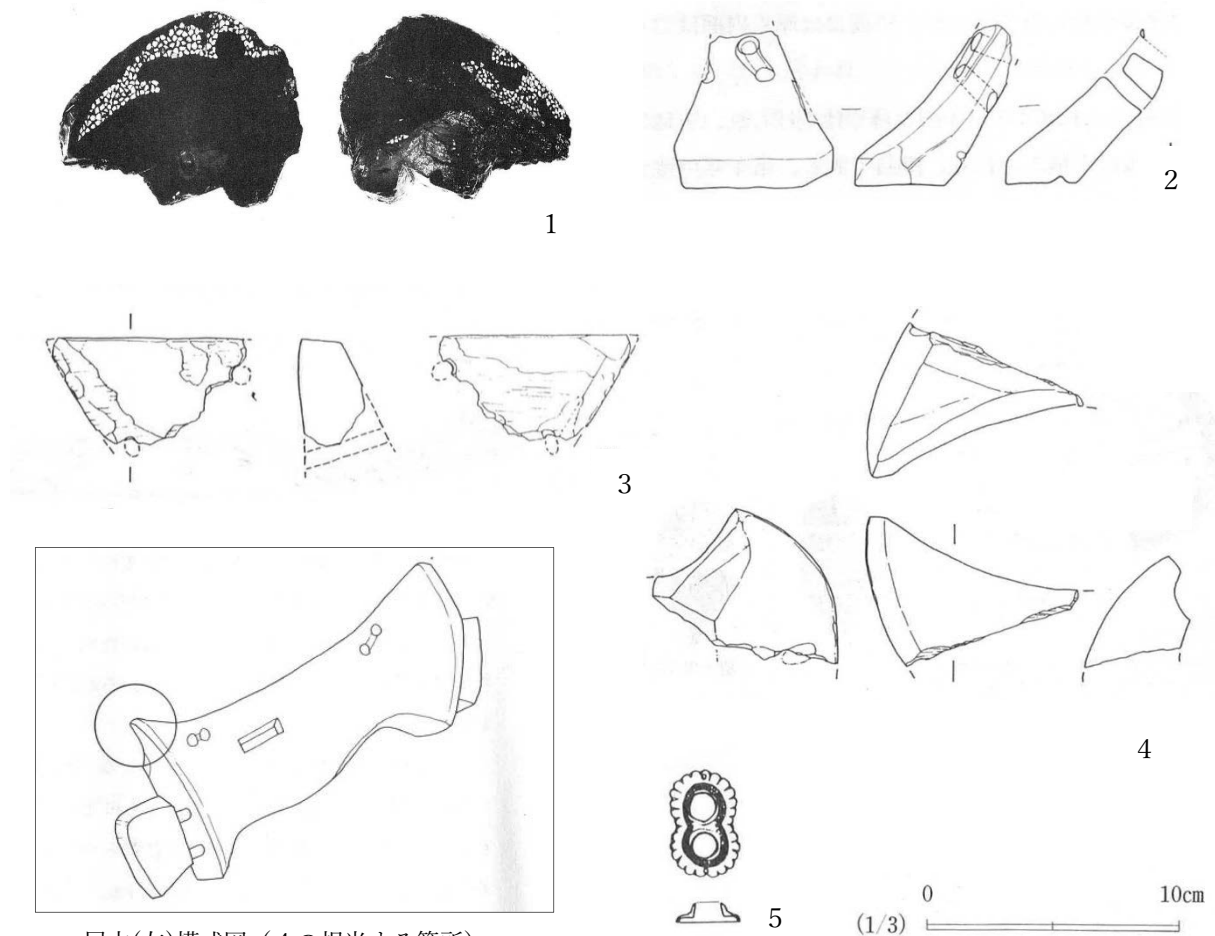
そして近年では、文様を彫った板状の製品が板締いたじめの型（版木）であることが明らかとなり、染め物の文様が具体的にわかってきた。衣服の柄なのかも知れない。

これらは、鎌倉で好まれた文様やデザインを明らかにする貴重な資料と言える。伝世品に頼るところの大きかった分野に、考古学的成果が多く情報をもたらすことになったのである。

馬具もまた、実用品という性格に留まらず、装飾性に富み、流行や騎乗する者の好みを反映するものであるはずである。文献に現れない野沓や鞍の管と見られるものにまで、装飾が施されているのである。

こうして遺物を細かく観察していくことで、「武士の都」と言われる鎌倉の「流行り」や「好み」に迫っていくことはできるだろう。出土する多量の遺物の中では点数は極めて少ないが、これらに今後も注目していく意義は大いにあると考える。

< 図1 鞍橋 >



居木(左)模式図 (4の相当する箇所)

(『佐助ヶ谷遺跡(鎌倉税務署用地)発掘調査報告書』1993より)

(写真のスケールは任意)

出土地点・掲載報告書 ※印は報告書刊行後、再実測を行ったもの。()内の年代は報告書記載の出土層位・遺構の年代。特記していないものは報告書中に言及の無いもの。

図1-1 北条時房・顕時邸跡(雪ノ下一丁目 273 番口地点)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4』1985年 鎌倉市教育委員会 2『諏訪東遺跡』 1985年 諏訪東遺跡調査委員会 3『北条時房・顕時邸跡』(雪ノ下一丁目 265 番3地点)(東国歴史考古学研究所調査報告書24) 1999年(ただし図は非掲載) 4『佐助ヶ谷遺跡(鎌倉税務署用地)発掘調査報告書』1993年 佐助ヶ谷遺跡発掘調査団 (13世紀第4四半期~14世紀初め頃) 5『千葉地東遺跡』(神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告10) 1986年 神奈川県立埋蔵文化財センター (13世紀第4四半期)

< 図2 骨(角)製の管 >

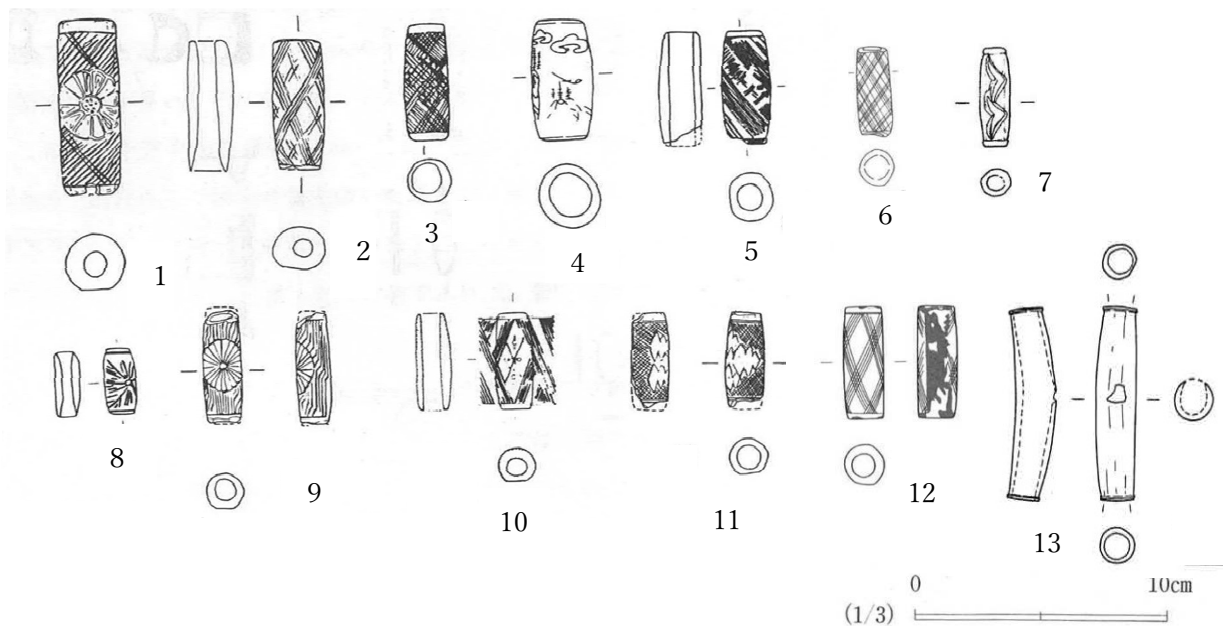
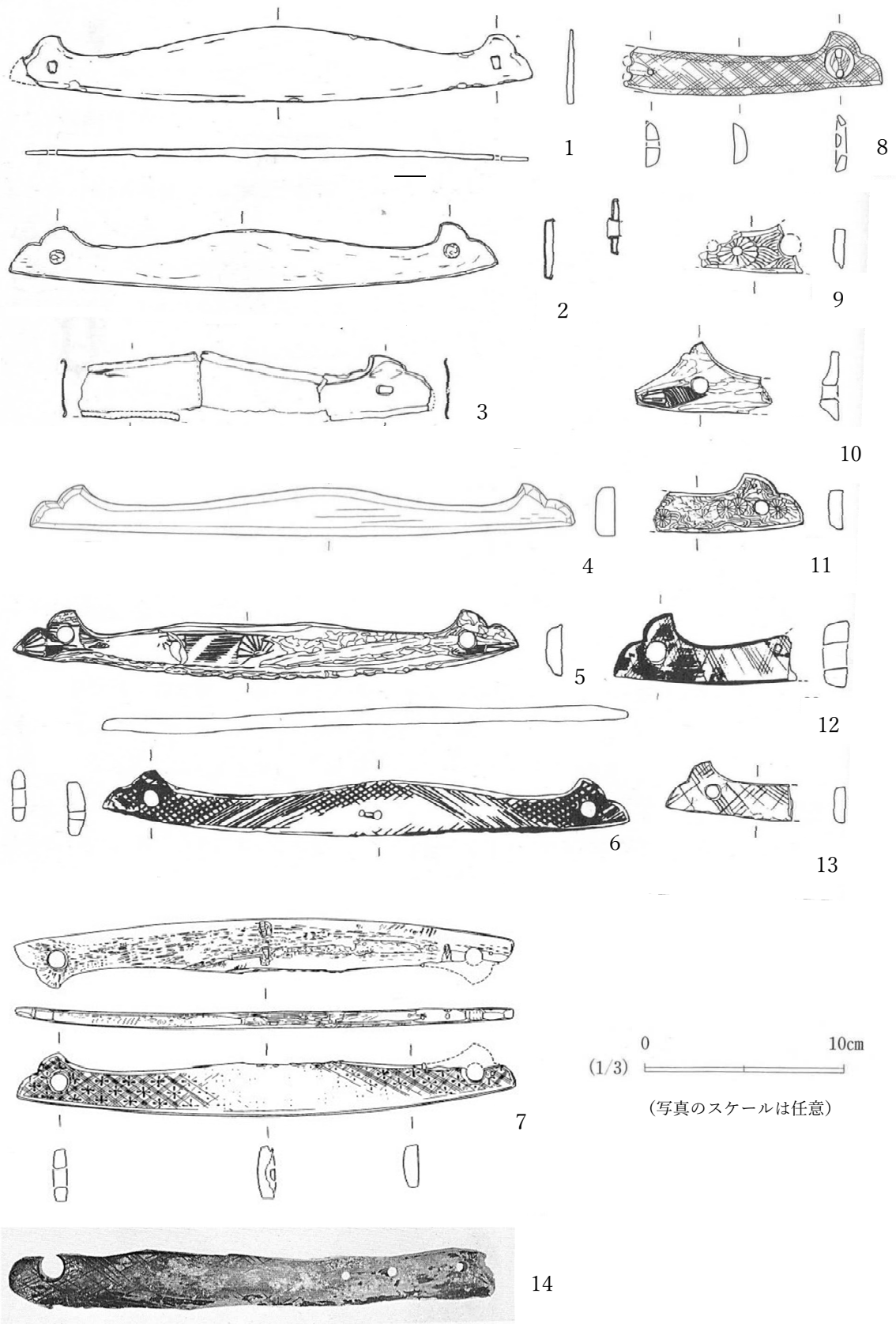


図2-1※『小町一丁目309番5地点発掘調査報告』(松風堂ビル建設に伴う中世遺跡(推定藤内定員邸跡)の発掘調査報告) 1983年(推定)藤内定員邸跡発掘調査団 2『佐助ヶ谷遺跡(鎌倉税務署用地)発掘調査報告書』1993年 佐助ヶ谷遺跡発掘調査団(14世紀前半) 3『千葉地東遺跡』(神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告10)1986年 神奈川県立埋蔵文化財センター(14世紀第3四半期) 4『長谷小路南遺跡』(鎌倉市由比ガ浜三丁目202番2外所在遺跡の発掘調査報告書)1992年 長谷小路南遺跡発掘調査団(13世紀第4四半期頃) 5『千葉地遺跡』1982年 千葉地遺跡発掘調査団(14世紀前半) 6『今小路西遺跡発掘調査報告書』(御成町171番1外地点)2008年(株)斎藤建設(13世紀中葉~14世紀前半) 7若宮大路周辺遺跡群(小町一丁目333番2地点)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書36』2020年 鎌倉市教育委員会(15世紀中頃以降) 8『千葉地遺跡』(14世紀中程) 9・11由比ガ浜中世集団墓地遺跡(由比ガ浜二丁目1034番15地点)未刊 10『諏訪東遺跡』1985年 諏訪東遺跡調査委員会 12『若宮大路周辺遺跡群』(ふれあい鎌倉ホスピタル建替え工事に伴う発掘調査)2021年(株)メディカルヘルスクラブ・(株)イビソク(13世紀中頃~後半) 13『西御門東やぐら群』(かながわ考古学財団調査報告181)2005年 財団法人かながわ考古学財団

図3-1※『千葉地遺跡』1982年 千葉地遺跡発掘調査団(14世紀中程) 2※北条時房・顕時邸跡(雪ノ下一丁目273番口地点)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4』1985年 鎌倉市教育委員会 3『諏訪東遺跡』1985年 諏訪東遺跡調査委員会(14世紀後半~15世紀前半) 4『今小路西遺跡発掘調査報告書』(御成町171番1外地点)2008年(株)斎藤建設(13世紀中葉~14世紀前葉) 5・10『長谷小路南遺跡』(鎌倉市由比ガ浜3丁目202番2外所在遺跡の発掘調査報告書)1992年 長谷小路南遺跡発掘調査団 6『千葉地東遺跡』(神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告10)1986年 神奈川県立埋蔵文化財センター(13世紀第4四半期) 7清涼寺跡(扇ガ谷四丁目507番1地点)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書36』2020年 鎌倉市教育委員会(13世紀前葉~中葉頃) 8『若宮大路周辺遺跡群』(ふれあい鎌倉ホスピタル建替え工事に伴う発掘調査)2021年(株)メディカルヘルスクラブ・(株)イビソク(13世紀代~14世紀前半)

< 図3 野沓 >



< 図4 轡 >

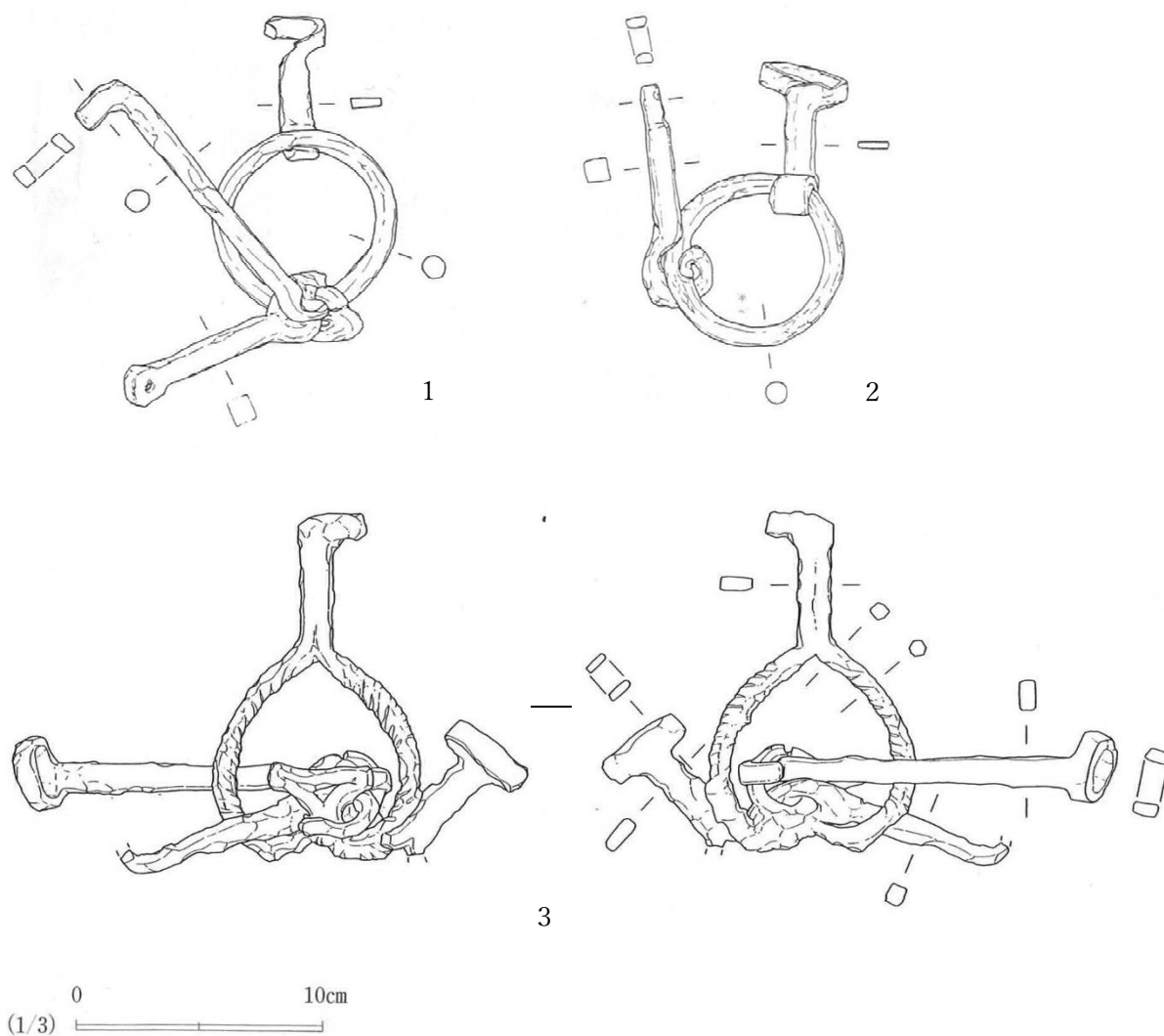


図3-9・11 由比ガ浜中世集団墓地遺跡（由比ガ浜二丁目 1034 番 15 地点）未刊 12『千葉地東遺跡』（14世紀第1四半～第2四半期） 13 由比ガ浜中世集団墓地遺跡（由比ガ浜二丁目 1034 番 15 地点）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9』1985年 鎌倉市教育委員会（14世紀前半） 14『蔵屋敷東遺跡』（江ノ電鎌倉ビル建設工事に伴う中世都市の発掘調査概報）1983年 江ノ電鎌倉ビル発掘調査団（13世紀第4四半～14世紀第1四半期）

図4-1・2 由比ガ浜中世集団墓地遺跡（由比ガ浜二丁目 1034 番 15 地点）未刊 3※『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』（小町一丁目 117 番 3 他 4 筆地点）2006年 鎌倉遺跡調査会（13世紀後半）・『鎌倉の馬』（鎌倉考古学研究所第7回シンポジウム 発表資料集）2021年 特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所

〈参考文献〉

- 及川司・武田寛生他 2010.12 『中屋遺跡（第二東名 No. 130 地点）』（静岡県埋蔵文化財調査研究所報告 第 234 集） 中
日本高速道路株式会社東京支店・財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 片山寛明 「和式轡の展開」 1990.12 『日本馬具大鑑 3 中世』 日本中央競馬会 吉川弘文館
- 河野眞知郎 「なぜ武具が出土しないのか」 1988.4 『よみがえる中世 3 武士の都鎌倉』 平凡社
- 菊川 泉 「鎌倉出土の武具・馬具」 1991.12 『中世都市研究 第 1 号』 中世都市研究会
- 小島摩文 「馬具の種類と名称について—データベース化のための標準名を考える—」 2015.1 『神奈川大学常民文
化研究機構年報 5』 神奈川大学常民文化機構
- 小松大秋編 『化粧道具』（日本の美術 No. 275） 1989.4 至文堂
- 小松大秋 「日本の中世鞍」 1990.12 『日本馬具大鑑 3 中世』 日本中央競馬会 吉川弘文館
- 小松大秋 「中屋遺跡出土瓜文螺鈿鞍について」 2010.12 『中屋遺跡（第二東名 No. 130 地点）』（静岡県埋蔵文化財
調査研究所報告 第 234 集） 中日本高速道路株式会社東京支店・財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 笹川祥生他編 1988.6 『真名本曾我物語 2』（東洋文庫 486） 平凡社
- 佐竹昭広他編 1993.10 『平家物語 下』（新日本古典文学大系 45） 岩波書店
- 鈴木友也 「古代日本の馬具」 1991.12 『日本馬具大鑑 2 古代下』 日本中央競馬会 吉川弘文館
- 鈴木則夫 「古代・中世の鞍橋に見る装飾技法」 1990.12 『日本馬具大鑑 3 中世』 日本中央競馬会 吉川弘文館
- 滝澤晶子 「若宮大路周辺遺跡群の発掘調査」 2022.8 『第 30 回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』 特定非営
利活動法人鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会・大河ドラマ「鎌倉殿の 13 人」鎌倉市推進委員会
- 竹内理三編 1977.4 『鎌倉遺文』（古文書編第 12 巻） 東京堂出版
- 寺島孝一・片岡肇編 1984.3 『法住寺殿跡』（平安京跡研究調査報告第 13 輯） 財団法人古代学協會